

主題	ご入居者ひとりひとりの「笑顔」を求めて
副題	趣味から始まる、ご入居者の暮らしの輪

サービスの質の向上	余暇活動の充実
-----------	---------

研究期間	6ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 多摩の里むさしの園
------	-----	-----	---------------------

発表者：野村 美鈴	アドバイザー：
-----------	---------

共同研究者：横山 純一 熊谷 彩 他4名

電 話	042-555-8151	メール	y-miyamoto@enseikai.com
FAX	042-555-8152	URL	http://www.enseikai.com

今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設は、平成10年に開設し、一部ユニット型の2ユニットも併設している定員168名の特養です。建物の特徴を生かした25名単位ブロックケアとユニットケアという、それぞれの特徴を生かした2種類のケアを行っています。又、「その人らしさを大切に」の法人理念のもと、ご入居者が毎日を楽しく、快適に暮らせる自立支援を行っています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

従来型の特別養護老人ホームとして長年培った経験やノウハウも活かした、ユニットケアの運営に取り組んでいるが、日々の業務やベースケアに終始してしまい、「ご入居者に十分な支援が行えていないのではないか。」という疑問や課題があった。

そんな中、ある職員から「もっと、充実した暮らしをご入居者に提供できないだろうか。」という意見があり、『ご入居者一人ひとりに満足していただけるケアとは。』について職員全員で話し合いを行った。

話し合いの中から

- 1.ご入居者の趣味。
- 2.今、興味のある事。
- 3.今後、やってみたい事。

以上の3点について、聞き取り調査を行い、その中から、『暮らしの活性化に繋がるレクリエーション』の取り組みを行う事とした。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

○目標

ご入居者が趣味の活動やレクリエーションを通して、他のご入居者や職員との交流を深め、潤いのある生活環境の提供と活動範囲の拡大を目指す。

○期待する成果

- ・趣味を活かした、個別～少人数の活動・関わりを通して、ご入居者同士の「馴染みの関係」の構築。
- ・誰でも見る事ができる場所に、予定表を掲示することで、ご入居者・職員だけでなく、ご家族も交えた余暇活動の実現。
- ・交流の中から、気軽に色々なことが話せる関係の構築。
- ・情報収集により、レクリエーションだけでなく、より多角的な視点での個別ケアの実現。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- 1.ユニット会議を開催し、情報収集の方法やレクリエーションの実施方法等を検討。
- 2.レクリエーションを行うにあたり、ユニット内で職員一人ひとりがご入居者への聞き取りを行い、『個別嗜好表』『趣味別グループ表』の作成。
- 3.『月間レクリエーション予定表』を作成し、ご入居者・ご家族・職員の目に入る場所に掲示し、参加者を募集。
- 4.予定表を基にレクリエーションを開催し、行った際の様子や気付いた事などを細かくケース記録に記入し、職員全体で情報を共有。
- 5.週1回のユニットミーティング、月1回のユニット会議で取り組み状況や問題点を協議し、実施内容・日程等の修正。

《4. 取り組みの結果と考察》

- ・取り組みを開始した当初は、職員やご入居者共に、戸惑いの表情やぎこちなく取り組んでいる様子が見られたが、取り組みを続けていくにつれ、ご入居者の意外な一面や、今まで聞けなかった昔の話等をして下さるようになった。
- ・囲碁・音楽鑑賞・絵手紙・散歩・絵画等の活動を行った。音楽鑑賞では、ご入居者がお部屋に集まり、お茶を飲みながら楽しめたり、囲碁の対局をしたりと、共通の「趣味」や「行いたいこと」を行う場の提供に繋がった。
- ・ご家族（奥様）がご入居者であるご主人を誘い、一緒に参加して下さる場面が度々、見られるようになった。
- ・月間の『レクリエーション実施担当者表』を作成した事で、職員が工夫して時間を作り、援助を行うことの習慣化ができた。・職員からも「大変ではあるが、ご入居者の為にも、今後も継続して行っていきたい。」という前向きな意見が聞かれた。
- ・援助を行っている職員も一緒に楽しく実施

しており、ご入居者のみならず、職員の笑顔も増えた。また、業務全般の前向きな取り組み姿勢や、会議等の場でも積極的に意見が出るようになる等、ユニット全体の士気も高まった。

《5. まとめ、結論》

ご入居者一人ひとりの声に耳を傾け、向き合う機会が出来た事で、遠慮がちであったご入居者も、気軽に参加して下さるようになった。また、活動が続けていくうちに、生活上の「不便に感じている点」や「要望」についても、すぐに話して下さるようになり、ご入居者の気持ちに配慮した的確な援助が実現出来るようになった。

今後も、ご入居者のみならず、ご家族も気軽に参加できる場の提供と、ご入居者と職員がより馴染みの関係を構築し、一人ひとりの気持ちを身近に感じながら、生活全般の支援を行っていききたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご入居者（ご家族）に事前に確認を行い、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《8. 提案と発信》

介護はハードとソフトの両面が揃い、初めて満足のいくケアが提供できると思います。そんな中、ハードは十分でも、ソフトの充実が思うように行かず、悩む日々が続きました。ですが、今回の取り組みから、職員全員が同じ方向をむいて、「その人らしさ」を大切にした、援助を実現する事が出来ました。職員の「何気ない一言」と、それを「聴く耳」が困難を大きく改善する力になる事を実感する事ができました。

【メモ欄】